〔研究ノート〕

日本語初級教科書における敬語の扱われかた

川　口　義　一

筆者は，各種の日本語初・中級教科書において敬語がどのように扱われているか，すなわち，その教科書の進度のどの段階で初出の項目として紹介されているか，どのような敬語形式が扱われているか，解説のしかたはどうか等について調査をする計画である。本稿は，この調査の始めの段階を一部紹介するものである。

現段階で対象とした教科書は，以下の4種類の初級教科書である。

(1) 国際交流基金編・『日本語初歩 Ⅰ・Ⅱ』・1981・凡人社（以下，〈初歩〉と略す）

(2) 早稲田大学語学教育研究所編・『外国学生用日本語教科書 初級』再訂版・1978・早稲田大学語学教育研究所（以下〈早稲田〉と略す）

(3) 吉田弥寿夫，倉谷直臣共著・『あたらしい日本語』(Japanese For Today)・1975・学習研究社（以下〈ＪＦＴ〉と略す）

(4) 青木晴夫，広瀬正宜，Jean Keller，佐久間勝彦共著・『日本語の基本構造』(Basic Structures In Japanese)・1984・大修館書店（以下〈ＢＳＪ〉と略す）

調査は，それぞれの教科書の本文および会話文においてどのような敬語形式が，何課で出てくるかを調べることから始めたのだが，この結果は次頁の表のようになる。

表中，「敬語形式」の欄の「～ている・～である」は，下線の部分を，それぞれ，「おいでになる・いらっしゃる・おられる」「いらっしゃる・あられる」に換えて得られる諸形式を代表させたものである。また，「謙譲語特殊形式＋ます」は，「いたします・おります・参ります・申します」を代表させたものである。なお，問題を広く待遇表現の観点から考察したいため，「(お)～なさい」のように「狭義の敬語」ではない表現も採取した。

この表から分かることは，多くの敬語形式が特定の課に集中して出てくるということである。それぞれの教科書で「特定の課」というのは，〈初歩〉（全34課）では第33・34課，〈早稲田〉（全40課）では第38・39課，〈ＪＦＴ〉（全30課）では第19・30課（第19課は会話文），〈ＢＳＪ〉（全28課）では第28課である。各教科書の学習項目の配列において各種

敬　語　形　式	初　歩	早稲田	ＪＦＴ	ＢＳＪ
お／ご～になる	33	39	19・22・30	20・21・28
～れる／られる	33	40	19	
〔漢語サ変〕なさる・される		39	28	20
尊敬語特殊形式 （オイデニナル・クダサル・ナサル）	29・33・34	24・32・38・39	7・19・28・30	26・28
お／ご〔動詞〕だ		38・39	19・30	28
お／ご〔イ／ナ形容詞〕		6・10・28・39	10・27・28・30	8
お／ご～願う			30	
お／ご〔名詞・副詞〕	33	6・10・25・28・ 33・39	1・2・5・9・ 10・22	1・8・20・ 23・28
～ていらっしゃる・～ておられる etc		39	30	13・19
お／ご～する	33・34	19・33・39	7・19・26・ 27・30	28
お／ご～申し上げる・いたします	33	38・39	19・30	
謙譲語特殊形式（アガル・イタダク・ウカガウ etc）	29・33・34	27・32・39	30	
譲謙語特殊形式＋ます	33	38・39	7・19・25	
～ております・～てまいります 〈謙譲〉		38・39	19・30	28
お／ご〔名詞〕 （オテガミ〈ヲサシアゲル〉ect）		39	30	28
お／ご～くださる	34	39	30	28
お／ご～いただく	29・30	39	27	
～てさしあげる		39		
～てくださる	29	39		21・27
～ていただく	29	39		
(お／ご)～せて／させていただく			30	
お／ご〔形容詞・名詞〕 （オタカイ・オミヤゲ）	15・34	7・25・28	2・20・22・ 26・28	
～て まいり・おり・ございます		38		13・19
ございます〈アル〉	33	38	4	
〔イ／ナ形容詞・名詞〕ございます	33	38・39	4・19	13・23
です／ます 連体修飾・従属節	33		30	28
お／ご～ください （オ～ニナッテクダサイ ヲフクム）	33・34	8・16・19・27・38	4・19・25・30	

～てください・いただけ ませんか		14	30	8・26・28
(お)～なさい		16・32	9	

の敬語形式がどのように分布しているか，そしてその中で「特定の課」がどのように位置付けられているかを観察してみると，この４点の教科書に共通する特徴，および特定の教科書に固有の特徴を見いだすことができる。以下に，これらの特徴を略述する。

(1) 敬語形式の最も多く現れる「特定の課」が敬語を学習項目の中心にしており，解説・練習等も当該の課で扱われている：

〈ＢＳＪ〉以外の３種の教科書がこの特徴を共有する。一般的に日本語の初級教科書にはこの特徴の見られるものが多い。〈ＢＳＪ〉では，「特定の課」の学習項目の中心は〔使役〕〔使役＋受身〕であるが，「させてください」のような敬語形式が同時に導入されるようになっている。

(2) 「特定の課」より前の課では敬語形式がほとんど現れない：

調査対象の中では，〈初歩〉がこの特徴を持つ唯一の教科書である。表からも分かるように，〈初歩〉では，第33・34課以外には，受給表現を扱う第29課にしか敬語形式が現れない。第15課の例は「おはようございます」であるから，敬語形式としては特殊なものと考えれば，〈初歩〉では敬語が学習項目になる第33・34課より前の課では敬語形式を本文に出すことを意識的に制限しているとみなしてよい。

(3) 教科書全体にわたって敬語形式が現れている：

〈初歩〉以外の３種の教科書がこの特徴を共有する。特に〈早稲田〉〈ＪＦＴ〉にこの特徴が著しい。〈ＪＦＴ〉では，各課についている会話文の中に敬語形式が多く現れるようになっており，本文だけをみると (2) の特徴のほうが強く出ている。

以上，同じ初級レベルのものでも，教科書によって敬語形式の導入のしかたがかなり異なっていることが知れよう。学習項目をどのように配列・導入するのが効果的かということは，もちろん特定の教授法上の枠組から必然的に導きだされるものであり，それぞれの教科書がそれなりの妥当性を持ってはいる。しかし，少なくとも敬語の学習に関する限り，(1) と (2) の特徴を合わせ持つような教科書（即ち〈初歩〉のタイプのもの）は望ましいものではないというのが筆者の意見である。この点については，調査結果をまとめる段階で改めて論ずることとする。

扱われる敬語形式の種類とその分布の他に，「敬語」という概念についての解説のしかたも調査の対象となっていることは言うまでもない。ここでは，解説上の問題点のうち次

の点を挙げておく。

それは，解説が教科書の用例のすべてをカバーしていないという問題である。例えば，〈ＪＦＴ〉の会話文には接頭語形式の敬語である「お―／ご―」がよく用いられているが，第30課で行われている敬語についての解説では，これらの「お―／ご―」の用例が説明できない。〈ＪＦＴ〉の会話文中の「お―／ご―」の用例は，例えば次の，第22課や第28課の会話の下線部に見られるようなものである。（下線引用者）

＃第22課　会話

Ａ：　まあ，立派なお庭ですね。……これからどんどん花が咲きはじめて，お庭がにぎやかになるでしょうね。

Ｂ：　庭からお花を切ってきて生けたりしますのよ。

＃第28課　会話

Ａ：　でも（略）何がいいかしら。果物なんかどう。

Ｂ：　いや，病院の食事以外は（略）一切だめらしいよ。

Ａ：じゃ，雑誌かお花にしましょうか。

これに対して，接頭語形式の敬語について言及している第30課の解説は次のようになっている。（下線引用者）

Japanese is a language having an intricate system of what are generally called 'honorific' forms, by means of which the speaker expresses his paticular respect for the person mentioned in a sentense.

The prefix O- or GO- attached to a noun refering to a person or a thing belonging to the person is one such form, as you have already seen, especially in the Conversation section.

第30課の解説で見るかぎり，人やその人の所有物につく接頭語「お―／ご―」は，話し手の，文中で述べられた人に対する尊敬の念を表す形式の一つだということになる。第22課の会話の，人物Ａの発話の「お庭」がこの説明に該当する敬語形式である。しかし，この説明では人物Ｂの「お花」も「尊敬の念を表す形式」になってしまい，人物Ｂは自分で自分に対する尊敬の念を表していることになる。もちろん，この用例は「自尊敬語」ではなく，美化語の例であろうが，接頭語「お―／ご―」の美化語的用法の解説はどこにもない。また，同じ人物の所有者でありながら「庭」には「お―」がつき，「花」には「お―」がつかないということについても，上記の解説では説明不可能でるあ。

同様に，第28課の会話の，人物Ａの発話の「お花」の用例も第30課の解説ではカバーさ

れていない。この会話は，人物A・Bが共通の友人を病院で見舞うについて，見舞いの品を何にするか相談をしている場面でのものである。ここで「花」は友人に与えられ，その所有物となるのだから，その意味で「お花」という形式になって，この友人に対する尊敬の念を表しているのだと，いちおうは解釈できる。しかし，その場合「雑誌」がどうして「お雑誌」にならないかは説明の範囲外に置かれてしまう。人物Aが女性であるらしいこと，この「友人」が，会話全体においてさほど高くは待遇されていないことなどを考えあわせると，ここでの「お花」は友人に対する尊敬の念を表す形式なのではなく，美化語と見たほうがよいような性格のものである。第22課人物Bの「お花」と同様，第30課の解説だけでは説明不十分であると言わざるをえない。

同様な問題が〈BSJ〉の「おります」「さしあげる」の解説についても見られる。それぞれ，丁重語の用例を謙譲語用法で説明したり，女性特有の語法を一般的な用法であるように記述したりしているという問題である。〈JFT〉も〈BSJ〉も会話文をできるだけ自然な体裁のものにしようとしており，それ自体は歓迎すべきことなのであるが，そのような自然な会話文に現れる待遇表現の語用論上のバラエティについて配慮が足りないように感じられる。

以上，日本語初級教科書における敬語形式の種類とその分布，それぞれの敬語形式の導入の構成，「敬語」についての解説のしかたなどについて調査した結果の一部を紹介した。調査項目は，この他，練習問題の構成・付属テープの音声表現などに及んでいるが，今そのすべてに言及する余裕はない。成稿した段階で改めてご批判を乞うことになろう。

最後に，日本語初級教科書・教材各種における敬語形式の扱いについて概観すると，全般的に言って，各種の敬語形式の構文論上の，意味論上の，および語用論上の相違について細かい配慮がなされないまま，敬語形式の種類の数だけが競われているという印象を持たざるをえない。これは，待遇表現全般についての応用言語学的研究が遅れていること，そのために教材編集者や教師が待遇表現を「やっかい者」扱いしていることと関係ある現象であると思われる。調査結果の発表は，このような状況に対する批判の論としても意味あるものにしたいと思っている次第である。

（1985年10月29日提出）